

氏名 行 武 正 躬

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学位授与番号 乙 第 3 2 5 号

学位授与の日付 昭和43年12月31日

学位授与の要件 博士の学位論文提出者
(学位規則第5条第2項該当)

学位論文題目 肝疾患時の Glucuron 酸抱合に関する研究

論文審査委員 教授 小坂 淳夫 教授 平木 潔 教授 大藤 真

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

肝障害時の glucuron 酸抱合能の推移を検討する目的で肝疾患患者に安息香酸負荷した際の副抱合生成物である benzoyl glucuronide の推移を検討し、顕性黄疸時、benzoyl glucuronide は急性・慢性肝炎では非顕性黄疸期より高値を示し glucuron 酸抱合能の亢進を認めたが肝硬変症では非顕性黄疸期に比し不変乃至低値を示し glucuron 酸抱合による代償には限度があることを認めた。急性・慢性肝炎の経過観察例では極期には benzoyl glucuronide は低値を示すが回復と共に増加を認めた。benzoyl glucuronide 量と膠質反応とはよい相関関係が認められた。総胆管結紮を行った実験的黄疸家兔では安息香酸投与時の benzoyl glucuronide 馬尿酸合成能の推移及び肝機能との関係を検討し、単純結紮群では benzoyl glucuronide は結紮後増加するが安息香酸、馬尿酸排泄量が最低となる際、既に低下の傾向を示し、glucuron 酸抱合の代償作用も限度があることを認めた。また肝障害家兔群では単純結紮群より benzoyl glucuronide 量も低値であり、肝実質障害が強くなれば、より代償作用は低下することを認めた。

論文審査の結果の要旨

本研究は肝障害時に直接 bilirubin 中の glucuron 酸抱合型の減少する機転を安息香酸投与時にみられる Benzoylglucronide の形成能と比較して検討したもので、肝障害高度のさいは glucuron 酸抱合能は較度のさいの抱合能の亢進とは逆に低下することを実証しており、肝解毒能と Bilirubin-glucuronide 形成能との関係を明らかにした重要な知見であると考ええる。

よって本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。